

歴史探検ロマン

竹田キリシタン資料館

洞窟礼拝堂をめぐる

吉田 勝 重

(会員 佐伯市女島)

令和元年十一月十四日、元年度研修行事「第三十二回歴史ロマン探検隊」が実施された。

早朝七時半、大手前の市営駐車場に集まり、竹田に向けて出発。今回は昨今のキリシタンブームに合わせて、岡藩のキリシタン資料館と歴史資料館、山手のキリシタン礼拝堂を訪問した。竹田温泉花水月温泉館に駐車し徒歩にて市内を廻った。

第一の訪問地「竹田キリシタン資料館」は二年前に作られたもので、竹田に伝わるキリシタン遺物を一堂に展示し、キリシタン関連及び竹田市内の観光施設を案内するガイド館として利用されている。市内中心部にあり気軽に利用できる資料館として多くの人に活用されている。

る。一年間に一万人以上の訪問者があるという。

この資料館には一次資料「宣教師に関わるもの」が多く置かれている。私たちは展示しているキリシタン遺物と、関連する人物について説明を受けた。

一部を紹介しよう。

一、サンチャゴの鐘



この鐘は「サンチャゴの鐘」と呼ばれる銅鐘で国指定重要文化財である。従来は竹田歴史資料館で展示されて

いたのですが、現在、歴史資料館が改装中のため、この「キリシタン研究所資料館」に展示されている。

この鐘には「HOSPITAL・SANTIAGO」(サンチャゴ病院)の銘と一六一二(慶長一七年)の年号が彫り込まれている。日本切支丹宗門史の作者レオン・パジェス氏によると、このサンチャゴ病院は「切支丹宗門史」慶長一九年(一六一四)の条に聖ヤコブ病院の名で記されている。長崎のミゼリコルディア(慈善院の付属病院であったらしく、誰からも見捨てられたライ病患者や普通の病人が収容されていたという。イエズス会のメスキリタ神父が私財を投じて造らせた外国人専用の教会であった。この教会の鐘である。

鐘の銘に彫られている年号、一六一二年は、この鐘が鑄造された年であろう。奇しくもこの年は、徳川幕府による第一次禁教令発布の年でもある。

織田信長や豊臣秀吉(初期)の時代までは、キリシタンや宣教師たちに対し穏やかに接し、カトリック教会の保護をうたい海外との交易を行っていた。秀吉の天下統一以後は一転して禁教に方針を変更している。秀吉は天正十五年(一五八七)にバテレン追放令を出し他の教

会領となっていた長崎を直轄領とし宣教師を追放している。

慶長一七年(一六一二)の禁教令は、徳川政権になって初めてのもので、直轄領であった江戸・京都・駿府などのに布告した禁教令であった。しかし、この法令を各地の大名は自分の領土に法として知らしめた。実際、幕府からの正式の禁教令通達は六年後の元和四年(一六一八)十二月十九日に出される。「伴天連追放の文」と言われ以心崇伝(いしんすつてん)(一五六九〜一六三三金地殿崇伝)の起草まで待つ事になる。

このサンチャゴ病院は禁教令の出された翌年、元和六年(一六二〇)に長崎奉行長谷川権六の命令により破壊されている。この鐘はこの年メスキータ神父が帰国する際に持ち出す予定であったらしいが、メスキータ神父が死亡し国内に残されたと考えられている。鐘の大きさは高さ八〇・五cm、口径六六cm、重量一〇八・五kgある。明治六年の「全国城郭存廃ノ処分並びに兵营地等撰定方(廃城令)」により大蔵省の管轄となった岡城は他の城と同様廃城処分される事になる。城が壊された時、岡城(岡藩・中川家)の城の中からのこの鐘が発見された。

このサンチャゴの鐘が、なぜ岡城から発見されたのか。いくつかの説がある。

第一の説は、府内藩竹中采女正重義うねめに関わるものである、この竹中重義は府内藩二代目藩主で、寛永六年（一六二九）に長崎奉行に任じられている。その後寛永十一年（一六三四）に長崎代官末次平蔵や堺の商人平野屋三郎衛門などの訴えで国禁の密貿易が発覚し、諸々の不正等で長崎奉行を罷免され切腹、府内藩改易となった。この長崎奉行の時代はこの鐘を手に入れたのではないか、城受け渡ししの任についた岡藩二代藩主中川久盛が持ち帰ったのではないかという説。

第二は、唐津藩主寺沢広高が唐津城を建設し、唐津藩の藩庁として唐津地方の代官の仕事を行っていた時代、寺沢氏は天草四郡を含む十二万三千石の大名であり、多くのキリシタンや宣教師と交流があった。博多の聖福寺しほうげんゆうの耳峰玄熊みみねげんゆうという臨済宗の僧を招き、中国・明・朝鮮と交易させていた。また唐津城内に近松寺きんしょうじという檀家のいない寺を建てて外交を行わせていたという。この時寺沢氏が手に入れたのでは、二代目の寺沢堅高の代に領内の島原で乱が起き、天草富岡城の城主としての責をとわれた。

領地は天草四郡の没収であったが、その事を苦にして、正保四年（一六四七）に自殺。後継ぎがなかったので寺沢氏は改易となった。この時の城受け渡しにも岡藩二代藩主中川久盛が参加している。この寺沢氏を經由して岡藩に持ち帰ったのではないかという説。

第三はこの二代中川久盛の時代に、ヨハネという洗礼名を持つ岡藩のキリシタン家老古田重治が持ち帰ったのではという説、がある。これは古田家の菩提寺が高流寺であり近くに岡藩の菩提寺もあること。この高流寺の初代が、寺沢広高が建てた近松寺から来た事や、藩主の中川久盛がこの寺に二〇〇石の寄進を行っている事等がその理由として考えられている。

これらの説のすべてについて決定的な史料が残されて無いが今は竹中説が定説とされている。サンチャゴの鐘は平成二十四年の別府大学の成分分析やマイクロスコープを使った実測などから国内で作られた可能性が高いとされている。同様な鐘は国内に四体あるという。現在、サンチャゴの鐘は、岡城から中川神社に移されている。

二、聖ヤコブの像



聖ヤコブの像

この像は「聖ヤコブの像」と考えられている。昭和三六年（一九六一）、岡藩の不浄蔵下の谷の藪の中から発見され耳や鼻、首の一部が欠けている。本来は下の胴部分もあったと思われる。上半身の胸像だけだったかもしれない。

聖ヤコブ像は、スペインにある聖ヤコブの墓（サンチャゴ・デ・コンポステーラ）の石像とも類似している。ちなみに聖ヤコブはスペイン語で「サンティアゴ」、即ち「サンチャゴ」と発音する。しかし、この像が聖ヤコブ

像と裏付ける史料は今のところ発見されていない。聖ヤコブの像と推定する理由を、故久留米大学教授竹村覚氏は、著書「キリシタン遺物の研究」（昭和三九年・開文社）の中で、「制作した石工は、明らかに外国人石工と思われる。聖ヤコブ病院の鐘（サンチャゴの鐘）と聖ヤコブの像はどう考えても切り離して考えられない。おそらく岡藩のキリシタン家老古田重治（霊名ヨハネ・古田織部の弟重則の三男）等の取り成しで隠しておいたのではないか、明治初年まで蔵に隠されていたのではないか。発見された場所は、城内の稲荷社付近ではないかと」と話している。

ヤコブは戦いの軍神である。昔は戦場で使用する鎧、兜、幟旗にキリスト教関連の指標を付けていた。戦いに勝った時、「イエズス・マリア・サンチャゴ」と勝鬨を上げていたという。

平成二十七年（二〇一五）、この像の成分分析した時この石材は日本のものではない。地中海の砂岩で作られており、後ろ髪（の）髪形から十三世紀のものと考えられる。南蛮からの渡来物であろう。長崎にあったのではないだろうかと言われている。

この像は禁制時代には、キリシタン関係の物として蔵に密かに隠されていたのではないか。その跡には稲荷社が建てられていたという事実がある。

三、古田織部重然しげなり

サンチャゴの鐘と聖デウスの像は、岡藩のキリシタン史を語る場合に重要な位置を占める。岡藩はキリシタン大名中川清秀の息、中川秀成を初代とする大名である。二代中川久盛は中川秀成の次男であり、この二つのキリシタン遺物に何らかの関連があるのではと考えられている。

この中川家に家老として仕えていた五家（田近平右衛門、田近玄蕃、戸伏宗慶、古田重勝、熊田平助）の一つに古田家がある。キリシタンであった古田重治は岡藩の家老職を勤めていたという。

古田家で特に有名な人は、古田織部重然がいる。

この古田織部重然は、千利休の七哲（蒲生氏郷・細川忠興・芝山宗綱・瀬田正忠・高山右近・牧村利貞・古田重然）の一人で、利休亡き後の茶道の宗匠として活躍する。信長、秀吉、家康、秀忠の四代に仕えた武将で、その正

室せんは中川清秀の娘である。重然は織部とも呼ばれた。慶長二〇年（一六一五）、豊臣家内通の罪（謀反）で叱責され、四人の子ども（重広・重尚・重行・重久）とともに自刃。古田織部家の直系は絶えた。

中川家の家老を務めた古田家は、古田織部の娘婿、古田平治重継（続）の家系である。古田重継は岡藩初代中川秀成の祖父清秀の弟であり、正室に古田織部の娘が嫁いでいる。中川家と古田家は親戚であった。重継は古田流茶道を引き継ぐと共に岡藩の家老職を務めた。重継の子、古田吉左衛門重則が二代目家老となり重勝、重恒と続く。

中川清秀、秀政はキリシタンであったという説がある。清秀の娘婿にキリシタン大名高山右近がいる。このような事から考えると、家老職であった古田家が



古田織部重然

岡藩に残る二つのキリシタン遺物（サンチャゴの鐘・聖ヤコブの像）を隠していたと思われても仕方がない。この二つの遺物の岡藩に至るまでの変遷ははまだ不明である。

キリシタン家老古田重治は、古田重則の子で重勝・重恒と兄弟であった。重勝が古田家を継いだが早逝し重恒（四歳）が幼少のため後見したという。

四、志賀親次

志賀親次は永祿九年（一五六六）に大友氏の家臣志賀親慶の子として大友三家の一角志賀氏の嫡流として誕生した。養母が大友宗麟の娘イサベラである。

天正十二年（一五八四）九月、父の後を継ぎ家督を相続する。翌十三年（一五八五）府内にあるイエズス会の神学校コレジヨに入学し、ドン・パウロの洗礼名をいただく。この神学校は天正九年に豊後府内に作られた施設である。親次は岡領内に布教するため、レイマン司祭を招き、修道士を派遣してくれるよう要請する。この年、岡にペドロ・ラモン司祭と二人の修道士が岡を来訪し、家臣や領民四千人に洗礼を行った。天正十二年（一五八四）

当時、六千から八千の信徒がいたという。信徒数は岡藩として中川氏が納めるようになっても増加し、慶長年間には一万五千人の信徒がいたとマリオ・マレガ氏が豊後の切支丹資料に記載している。

志賀親次は天正十四年（一五八六）島津による豊後侵攻の際、岡城に立て籠もり抗戦、島津義弘や新納忠元の軍を滑瀬橋の戦い、鬼ヶ城の戦いで撃破。その後もゲリラ戦を続け豊臣秀吉の豊後上陸、島津氏降伏まで岡城を死守し感状を受けている。

岡城を守り抜いた志賀親次は、文祿二年（一五九三）の朝鮮の役で大友義統が救援しなかったという失態により豊後一国が没収、これに殉じて岡城を去る。

翌年中川秀成が岡城に入封される。その後親次は二十六年間各地を流浪し、元和五年（一六一九）毛利輝元に預けられ、山口県美祿郡太田代に落ち着く。万治三年（一六六〇）九十三歳で人生を終えている。

岡藩におけるキリシタン布教はその後も継続され、慶長九年（一六〇四）岡藩主中川秀成が志賀の地に聖堂を建てることを許可している。元和三年（一六一七）の頃には古田重治が殿町赤松谷に洞窟礼拝堂を建設し宣教師

フランススコ・ボルドリノを保護している。

この「キリシタン資料館」の説明を受け館内を視察。館内には慶長五年（一六〇〇）に家康が出した「東照神君宗門十五ヶ条」や寺院が寺請証明として発行し奉行所に提出した「宗旨証文」などの古文書、キリシタン関係の遺物（十字架・踏絵・神父の衣装など）が展示されていた。



異相地藏
やや首を傾げ、足先を
見せるN家のお地藏様

キリシタンであった武家に伝わる「異相地藏」や御霊屋公園にある「ダイヤ十字架」、竹田の街中に数多く残る「五角形の稲荷社」などは初めて見学する物で岡藩と

キリスト教の関係を研究する人々にとって、研究の対象となるものであろう。

五、キリシタンホール「イコン」

次に私たちはすぐ近くにあるキリシタンホールに向かった。そこには「イコン」と呼ばれる画像が展示されていた。



イコン 17世紀
キリスト像

「イコン」とは、イエスキリストや聖人、天使、聖書における重要な出来事やたとえ話、教会史上の出来事を画像にしたものである。キリスト教の一派東方正教会が

持っていた。キリスト教のお墓に置いて一つの像として残されたものである。モーゼの十戒の頃には一時的に衰退した。のち復活している。世界で一番古い物は四世紀の物がある。このキリシタンホールには、イコンが三五〇点程集められている。

六、キリシタン洞窟礼拝堂

キリシタンホールや資料館からやや離れた所に殿町武家屋敷群がある。古い土塀に囲まれた武家屋敷が今も整然と建ち並んでいる。

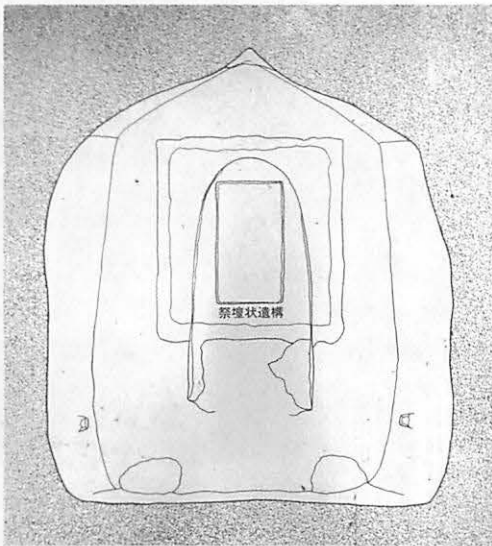
その武家屋敷に古田家の長屋門が残っている。

この古田邸のある武家屋敷の右手奥に「キリシタン洞窟礼拝堂」がある。この洞窟は昭和二十八年頃に発見された。洞窟の入り口には三段の階段があり、奥には祭壇のような窪みがみられる。

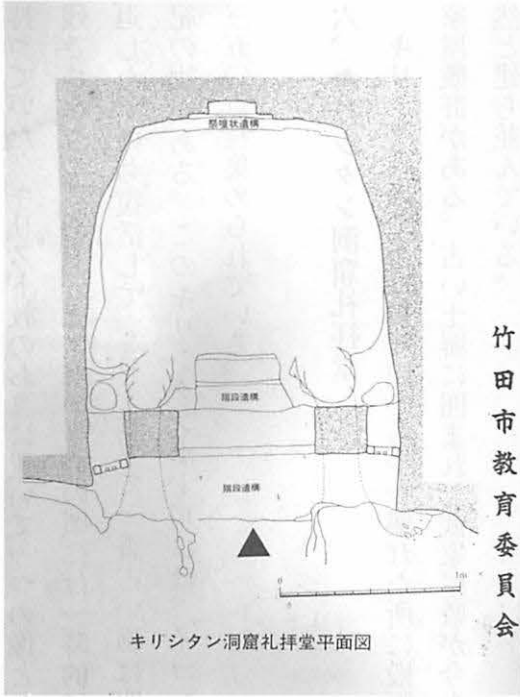
この洞窟礼拝堂は、ヨハネという洗礼名を持つ岡藩家老古田重治の土地であったのではと推察されている。その為、このキリシタン名を持つ重治が、宣教師を匿うために作らせたという説もある。

この洞窟礼拝堂付近は延享三丙寅年（一七四六）の「切

支丹洞窟礼拝堂古地図」では「此の凶御封内御守衛の巻所載の要地なり。添画の大路小路曲径屋敷等守用之無用者皆略之所也」と書かれている。洞窟入り口に大きな楕円形の土地が図示されており、周辺の山々に五カ所の見張り所が作られていた。何の理由で設置されたのか、キリシタン以外の者の接近をいち早く察知する為のものか、今後の課題の一つである。



キリシタン洞窟礼拝堂断面図



礼拝堂平面図と中央の祭壇



このキリシタン洞窟礼拝堂に、元和年間（一六一七～一六二三）に、七人の宣教師が匿われていたと宣教師の手紙に書かれていた。うちの一人若きイタリア人宣教師は、伊達政宗を頼っていく途中、長崎の島原で捕まると伝えられている。

また、昔はこの中に金色のマリア像があり布教の時に使われていたと言う。また、この洞窟の下の窪地に水が湧き出しており、聖水として使用されたという。

これらのキリシタン関係の教会は、慶応二年（一八六六）までに長崎の大浦天主堂以外はすべて壊されたという。この洞窟礼拝堂はそのような中でも密かに使用され残されていた事は驚きである。

七、岡城

このキリシタン洞窟礼拝堂の視察のあと、中世の山城岡城に向かった。

岡城は中川氏岡藩の居城として有名であるが、歴史は古い。伝説では文治元年（一一八五）、緒方荘司緒方惟栄が源義経を迎えようとして築壘したという。しかし源義経等の一行は兵庫県尼崎の大物ヶ浦沖で風雨に遭

い、九州に来ることはかなわなかった。その後建武年中（一三三四～一三三七）に、大友氏の支族である志賀貞朝が後の本丸以東を修築、岡城と称したと言う。標高三二五メートルの阿蘇溶結凝灰岩の台地上にあるこの城は、後の大友・島津の合戦にも堅固に敵を寄せ付けず志賀氏の名を大いに高めた。

大友氏改易の後、中川秀成が播州三木城より家臣四千名を引き連れ文禄三年（一五九四）に入部、城作りに着手した。お城の縄張りに石田鶴右衛門を任命し、天神山を本丸として二の丸、三の丸を備えた。加藤清正の意見に従い、大手門を西向きに変えている。現在登城口より上ると大きな石垣の大手門跡にであう。その大手門跡のやや上に旧大手門跡が残されている。

下原口を搦め手とし西の方に拡張したそうである。

中川氏が代々統治し、明治の廃藩置県までその雄姿を誇っていた。明治六年の全国城郭存廢の処分並びに兵営地等撰定方という太政官達しにより廢城となった。